



どんぐり

No. 46



兵庫県立
南但馬自然学校

HYŌGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKŌ
(Nature Education Center)

(朝来山に咲くセンブリの花)

自然体験活動の指導に求められる

学校教員の資質能力について

兵庫教育大学プロジェクト研究から (抜粋)



兵庫教育大学学校教育研究センター助教授

別 惣 淳 二

【はじめに】

これまでの自然体験活動の研究を概観すると、体験した子どもの教育的成果について研究したものが多く、自然学校についても、県立南但馬自然学校発行の『研究紀要』や兵庫県教育委員会発行の『自然学校10周年記念誌』のなかで子どもたちの体験の成果が明記されている。また、本学では、千駄・赤松(2003)が県下の公立小学校10校の教員と子どもを対象に質問紙調査を行い、自然学校で育成される態度は「学習の基本的態度」、「協力」、「学習の仕方」、「課題の達成」であると報告している。

しかし、そうした自然体験活動による子どもの成果が、その指導に携わる学校教員のどのような資質能力の発揮によって得られているのかは明らかにっていない。それを明らかにすることは、学校教員の養成・研修において非常に有効であると考えられる。というのも、自然学校は、学校教員が中心になって指導してこそ学級の子どもたちにより良い教育的成果が生まれると考えているからである。そこで、この研究では、自然学校を研究のフィールドとして、子どもたちの自然体験活動の指導で学校教員にどのような資質能力が求められるのかを明らかにしようとした。

【調査方法】

1年目の平成13年度は、自然学校の受入施設指導者を対象に「自然学校の指導において学校教員に求められる資質能力は何か」を自由記述方式で回答を求め、その回答から抽出した39の質問項目について再び主要受入施設の指導者に質問紙調査を実施した。

2年目の平成14年度は、県下の小学校教員に同様の39項目の質問紙調査を実施し、前年度実施した受入施設指導者の結果と比較・検討した。

さらに、3年目の平成15年度は、実際に自然学校が実施されている各学校の活動現場に向き、1年目と2年目の分析結果から抽出した7つの「学校教員に求められる資質能力」がどの程度妥当性のある内容なのかを確認するために、一つの活動プログラムが終わった時点で指導された小学校教員と子ども全員に質問紙調査を実施した。小学校教員の質問項目は39項目の中から7つの「学校教員に求められる資質能力」を反映した20項目を、一方、子どもの質問項目は、千駄らが開発した「自然体験で培われた能力尺度」と「楽しさ体験尺度」から20項目を採用した。これにより、7つの「学校教員に求められる資質能力」が妥当であれば、それらの資質能力をより高く発揮している小学校教員ほど、子どもの成果も高くなると考えたのである。

【結 果】

(1) 自然学校の受入施設指導者・小学校教員からみた「学校教員に求められる資質能力」

1年目に自然学校の受入施設指導者を対象に39項目からなる質問紙調査(尺度は5段階尺度で、①重要でない、②あまり重要でない、③どちらともいえない、④少し重要である、⑤重要である)を実施し、その回答に因子分析を施した結果、自然体験活動の指導で求められる学校教員の資質能力は、自然体験活動プログラムの対する教員の「共通理解と集団指導力」、「安全管理・安全指導の能力・知識」、「自然体験活動の知識」、「企画・指導技術」、「状況予測力と対人関係能力」、「関心・意欲」、「元気・体力」の7つで構成されることが分かった。

また、2年目に同様の質問紙調査を小学校教員にも実施し、7つの「学校教員に求められる資質能力」に基づいて平均値(値の範囲は1~5)を算出した。その小学校教員と受入施設指導者の平均値を示したものが表1である。表1から、「自然体験活動の知識」と「関心・意欲」は小学校教員よりも受入施設指導者の方が学校教員に強く求められると

(3) どんぐり

(表1) 7つの「学校教員に求められる資質能力」の重要度

7つの資質能力名	小学校教員の 平均値	受入施設指導者の 平均値	検定
共通理解と集団指導力	4.2	4.3	
安全管理・安全指導の能力・知識	4.4	4.5	
自然体験活動の知識	3.8	4.0	***
企画・指導技術	3.8	3.9	
状況予測力と対人関係能力	4.3	4.3	
関心・意欲	4.1	4.4	***
元気・体力	4.4	4.2	***

※検定は、*: $p<.05$ 、**: $p<.01$ 、***: $p<.001$ を意味する。

答えているのに対して、「元気・体力」は逆に小学校教員の方が学校教員に強く求められると答えていた。しかし、そうした差異は認められるものの、全体的には、小学校教員も受入施設指導者もほぼ4.0以上の値を

示しており、7つの「学校教員に求められる資質能力」は双方から重要度の高い内容として認識されていることが分かった。

(2) 7つの「学校教員に求められる資質能力」と子どもの成果の関係

この7つの「学校教員に求められる資質能力」が実際の自然学校の指導場面において子どもたちの成果にどの程度影響を及ぼしているのかを知るために、自然学校を1学期に実施した小学校（13事例）と2学期に実施した小学校（7事例）に分けて分析を行った。

表2は1学期に実施した事例の分析結果であり、各資質能力ごとに小学校教員の自己評価が高かった「高得点群」と逆に低かった「低得点群」のそれぞれの子どもたちの成果を平均値で表したものである。なお、検定で「*」を付した子どもたちの成果は統計的に有意差が認められたことを示す。表2の平均値からも分かるように、ほとんどの資質能力では、高得点群よりも低得点群の小学校教員の方が子どもたちの成果が高く、統計的にも差が認められる。逆に、低得点群よりも高得点群の小学校教員の方が子どもたちの成果が高いのは、「自然体験活

(表2) 1学期に自然学校を実施した7つの「学校教員に求められる資質能力」と子どもの成果

学校教員の資質能力	共通理解と集団指導力			安全管理・安全指導			自然体験活動の知識			企画・指導技術		
	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検定
子どもの成果												
(1)自然体験で培われた能力尺度												
学習の基本的態度	2.9	3.0		2.9	3.0		3.0	2.9		2.9	3.0	
学習の仕方	2.5	2.5		2.5	2.5		2.6	2.5		2.6	2.5	
自己に対する理解	2.8	3.0	**	2.8	2.9	**	2.9	2.9		2.9	2.9	
協力	3.0	3.1		3.0	3.1	*	3.1	3.0	*	2.9	3.1	*
課題の達成	2.8	2.9	*	2.8	2.9	*	2.8	2.9		2.9	2.8	*
(2)楽しさ体験尺度												
親和・達成	3.3	3.3		3.3	3.3		3.3	3.3		3.3	3.3	
自然理解・快活	3.2	3.3	*	3.2	3.3	**	3.2	3.3	*	3.2	3.2	
学校教員の資質能力	状況予測力と対人関係能力			関心・意欲			元気・体力			全体		
	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検定
子どもの成果												
(1)自然体験で培われた能力尺度												
学習の基本的態度	2.9	3.0		2.9	3.0		3.0	3.0		2.9	3.0	
学習の仕方	2.5	2.6		2.6	2.5		2.6	2.5		2.5	2.6	
自己に対する理解	2.9	2.9		2.8	2.9		2.9	2.9		2.8	2.9	*
協力	3.0	3.1		3.0	3.1		3.0	3.1		3.0	3.1	
課題の達成	2.9	2.8		2.9	2.8		2.9	2.7	**	2.8	2.9	
(2)楽しさ体験尺度												
親和・達成	3.3	3.3		3.3	3.3		3.3	3.3		3.3	3.3	
自然理解・快活	3.2	3.3	*	3.1	3.2	*	3.2	3.2		3.1	3.3	***

(注1)「自然体験で培われた能力尺度」の平均値は、4件法（1：いつもできなかった、2：できなかったことが多かった、3：できたことが多かった、4：いつもできた）の尺度から算出し、「楽しさ体験尺度」の平均値は、体験者のみ4件法（1：ぜんぜん楽しくなかった、2：どちらかといえば楽しくなかった、3：どちらかといえば楽しかった、4：たいへん楽しかった）の尺度から算出した。

(注2) 検定は、*: $p<.05$ 、**: $p<.01$ 、***: $p<.001$ を意味する。

動の知識」における「協力」と「企画・指導技術」における「課題の達成」のみであった。

ところが、表3の2学期に実施した事例の分析結果を見ると、「関心・意欲」と「元気・体力」を除く他の資質能力の平均値は、すべて高得点群の方が高い。しかも、統計的にも有意な差が多く見られる。つまり、2学期の場合は、小学校教員の自己評価と子どもの成果が相関関係にある。「関心・意欲」と「元気・体力」の項目で高得点群の方が子どもたちの成果が低い値を示したことについては、「関心・意欲」「元気・体力」の値が高い小学校教員の様子を観察すると、それらの項目の重要性を十分認識しているがゆえに、教員の方が子どもたち以上に活動していることが多く見られ、その結果として子どもたちの成果を下げていると考えられる。

(3)まとめ

これらの結果から、以下の点が指摘できる。一つは、2学期の結果から、7つの「学校教員に求められる資質能力」は妥当性を有していることである。もう一つは、小学校教員は1学期よりも2学期の方が自然学

(表3) 2学期に自然学校を実施した場合の7つの「学校教員に求められる資質能力」と子どもの成果

学校教員の資質能力 子どもの成果	共通理解と集団指導力			安全管理・安全指導			自然体験活動の知識			企画・指導技術		
	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検 定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検 定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検 定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検 定
(1)自然体験で培われた能力尺度												
学習の基本的態度	3.0	2.9	**	3.0	2.9		3.1	2.9	**	3.3	2.9	***
学習の仕方	2.5	2.4		2.5	2.4		2.7	2.3	***	2.8	2.4	***
自己に対する理解	3.0	2.8	***	2.9	2.9		3.0	2.8	***	3.1	2.8	***
協力	3.1	3.1		3.1	3.1		3.2	3.0	*	3.3	3.1	***
課題の達成	3.0	2.9	*	3.0	2.9		3.1	2.9	***	3.4	2.9	***
(2)楽しさ体験尺度												
親和・達成	3.2	3.2		3.3	3.2	*	3.3	3.2		3.5	3.2	***
自然理解・快活	3.2	3.2		3.3	3.2	**	3.3	3.2		3.4	3.2	***
学校教員の資質能力 子どもの成果	状況予測力と対人関係能力			関心・意欲			元気・体力			全体		
	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検 定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検 定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検 定	高得点群 の平均値	低得点群 の平均値	検 定
(1)自然体験で培われた能力尺度												
学習の基本的態度	3.0	2.8	***	2.8	3.1	***	2.9	3.0	**	3.1	2.9	***
学習の仕方	2.5	2.5		2.4	2.5		2.4	2.5		2.7	2.3	***
自己に対する理解	2.9	2.8		2.9	2.9		2.8	3.0	***	3.0	2.8	**
協力	3.1	3.1		3.1	3.1		3.0	3.1		3.2	3.0	*
課題の達成	3.0	2.9	*	2.9	3.0	*	2.9	3.0	*	3.1	2.8	***
(2)楽しさ体験尺度												
親和・達成	3.3	3.2		3.2	3.3	*	3.2	3.2		3.3	3.2	**
自然理解・快活	3.2	3.2		3.2	3.2		3.2	3.2		3.3	3.2	*

(注1)「自然体験で培われた能力尺度」の平均値は、4件法(1:いつもできなかった、2:できなかったことが多かった、3:できたことが多かった、4:いつもできた)の尺度から算出し、「楽しさ体験尺度」の平均値は、体験者のみ4件法(1:ぜんぜん楽しくなかった、2:どちらかといえば楽しくなかった、3:どちらかといえば楽しかった、4:たいへん楽しかった)の尺度から算出した。

(注2)検定は、*: $p<.05$ 、**: $p<.01$ 、***: $p<.001$ を意味する。

校での子どもたちの学びの様子や状況を的確に把握し、評価できているということである。それは、1学期よりも2学期の方が学校での学級づくりの成熟度が高いことを表していると思われる。

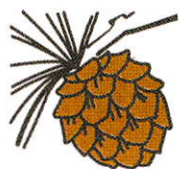
《引用文献》

千駄忠至・赤松幸子(2003)「自然学校で育成される態度とそれに影響を与える要因」、『兵庫教育大学研究紀要』第23巻第3分冊、59—66頁。

※本研究は兵庫教育大学プロジェクト研究として、長澤憲保(研究代表・兵庫教育大学学校教育研究センター教授)、上西一郎(別惣淳二(同大学学校教育研究センター助教授)、千駄忠至・荒木勉・福本謹一(同大学教授)、嶋崎博嗣・安原一樹(同大学助教授)、他4名が行いました。

なお、本プロジェクト研究の実施にあたり、兵庫県教育委員会ならびに南但馬自然学校、嬉野台生涯教育センターをはじめとする県下の関係教育施設、そして多数の公立小学校にご理解とご協力を賜りました。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

—自然学校の充実にむけて—



南但馬自然学校主任指導主事兼指導課長

中 島 浩

1 赤松？黒松？

本校で実施している自然学校1日講座での一コマ。講師の指導に対する受講生（県下公立学校教員）の反応である。松の木を見て、「この2種類の松の木の違いは「赤松と黒松です」「どう見分けるのでしょうか」「？」このやり取りを聞いていて、私もふと困ってしまった。赤松の生えているところの尾根付近は松茸が出るといった子どもの頃からの経験しか思い出せない。講師は松葉を受講生に取るように指示し、次に手のひらで触ってみるように指示した。

「痛い、こっちは痛くない」「葉が細い、長い、太い」等、の様々な反応が返ってきた。講師は、「痛いと感じた葉が黒松、やわらかいと感じた葉が赤松」と指導した。受講者はすぐ理解した。

2 ものがわかるとういこと

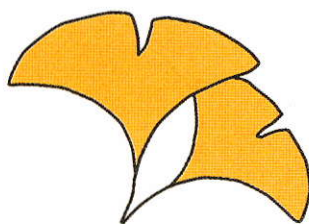
私たちは、ある物事を言葉や文字を通して知ることができる。その言葉や文字の本当の意味を分かっているかというところではない。松の木は知っているが、見分けがつかないのは、言葉や文字では分かっている、中身が分かっているというところである。最近の傾向として、物事を記号化した言葉や文字で覚えるため、言葉は分かっている、自然の中で物に對峙したときに言葉と実態が結びつかない。自然学校実施の教育的意義はここにあるのではない。直接的な体験や活動をとおして、言葉として知っている物事の本当の意味が子どもたちにイメージ豊かに感じられ、身についていくことである。このためには、引率指導者の役割は大変重要である。

3 「あれ？」

体験を通してものが分かるということ、知ることとは、子どもたちの成長にとって重要である。そのために教師は仕掛けをしないと達成できない。先に述べた講師の指導は本物の体験を仕組んでいる証である。自然の中の活動では「ちょっと待て、あれ、立ち止まってみよう」の「あれ？」がなくてはならない。ただ「あれ？」と発するだけで子どもたちの五感に周囲に張り巡らせることができる。しかし、「あれ？」をどこで発するかは入念な下見と教材研究が必要であるというまでもない。

○「あれ？夜に森へ」

自然学校実施要項には、日常生活では味わえない感動体験など自然学校で指導することにより効果が上が



る活動を行うと明記してある。子どもたちにとって夜の自然を感じる体験というものが少なく、平成7年に本校が調査した中でも、夜の道を歩く体験について37・2%が「体験がない」という結果が出ている。昨年度本校の活動の中で暗闇の体験実施率は12・2%である。夜のキャンプファイヤーⅡ自然学校から脱皮し、

懐中電灯をもって夜の森を歩きたい。普段の生活では夜にライトをつけて出歩くことが少ないから歩くだけでも子どもたちは楽しい。しかし、友達と夜道を歩く楽しみとは別に、生き物たちの夜の生活を探れば知る喜びに満たされる。灯りを消すといういろいろなものが見えてくる。灯りをつけているときには聞こえなかった沢山の音、鹿の警戒音。視界を断たれて聴覚が鋭くなってくる、視覚も次第に鋭くなり音がすれば振り向き目を凝らす。子どもたちにとってそれまでの体験が少ないだけに、このような活動で得られるものの期待が大きくなっていく。

○「あれ？雨がふるのに」

事前打ち合わせをすると、必ず体育館があるのかという質問がある。雨の場合、雨から逃げる？プログラ

ムが作られようとする傾向が強い。雨もまた自然である。安全さえ確保できれば雨だからといって活動内容を変更する必要はない。雨の中での活動は心に残る。やったあと心に残るということは、そこに普段にない苦労や工夫が伴うからである。雨にぬれ、服が汚れ、足元に注意をはらい、嫌な気持ちを振り払う努力をし、仲間とともに励ましあうことなど、晴れていればさほど必要のない苦労や工夫が、雨の日是否応なく伴う。だからこそ、活動後の満足感につながっていく。そして何より重要なのは引率教員の笑顔である。笑顔につられて雨の中に踏み出した時、子どもたちは多くの学びを得ることになる。

○「あれ？」

また野外炊飯をやる」

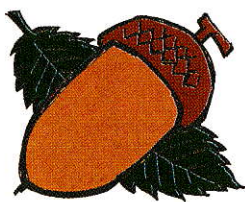
・・・定番プロからの脱皮
自然学校の定番プログラムといえば、野外炊飯である。子どもたちが興味関心を持ち意欲的に取り組む活動である。しかし、指導の仕方によつては、単に集団で食事を作らせる訓練的なことで終わることもある。1回の活動で炊飯技術がすべて身に付くわけでもなく、このような技術

の向上を目標にした取り組みは自然学校のねらいとは言い難い。ある学校の事例を紹介すると、ねらいは「料理コンテスト―味・見栄え・協力―」、日程は2日間、1日目はメニュー（カレー・焼きソバ・豚汁）を考えさえ、夜の活動で引率教員の相談コーナーを設け様々な相談を受け助言する。2日目は食材の買出しから始まる。お皿の数が足りなくなつた、ホウの葉、竹をお皿にしておにぎりに入れて入れよう。箸が足りない、木の枝を削ろう・・・子どもたちの無限の発想が出てくる。見栄えについては、テーブルを自然物で飾りつける、箸置きを熊笹で作る。子ども達の発想には驚かされるばかりである。また、ある学校は、ねらいを「ごみなしメニューに挑戦」とし、野外炊飯を3回にわたって実施した。食材から食べられる量を計算し調理する、飯ごうの中の一粒の米も無駄にしない、そして残飯量を量つていった。3回目になると残飯は微量になった。児童と先生の会話である。「先生、もう1回野外炊飯やりたいな。リーダーのお兄さんから玉葱の皮で染め物ができると聞いたよ。ゴミになるところなんてひとつもないね。」

4 しおりシラバス？

○何のために

子どもたちにはこんなことを体験してみようという構えを持つて自然学校に参加させることが重要である。そのためには、今活動していることが、「何をめざしていて、今までの学校の勉強とどうつながり、どんな知恵や技を体得するのか」ということである。このことは5年生なりに理解するはずである。このことを子どもたちに伝えなければならぬ。伝えなければ、一つひとつの活動が細切れの体験だけで終わりになつてしまふ。伝える方法は様々であるが、「しおり」に明記しておけば、体験後の振り返りに記録として生かされていく。



○学びを促すために

最近、大学では年度始めに授業計画である「シラバス」が学生に示される。それを見て学生は1年間の学習の見通しを持つことになる。このシラバスこそが「しおり」ではないだろうか。本校に到着されたときに各学校の自然学校のしおりをいただく。日程、係活動、諸注意から健康のこと布団のたたみ方そして本校の地図等、かなり分厚いしおりである。読み込むだけでも相当な時間を要する。

この「しおり」であるが、児童一人一人がメモ書きした自分らしさのある「しおり」にならないかと思う。また、5泊6日の記録ができるようにならないか。ひとつの活動が終わるとすぐ次の活動に進むのではなく、体験を通して気づいたり発見したことを振り返り、そのことを共に体験した友達と分かち合うことにより学びを深めていくことが大切である。その内容をしおりに書き込む。そうして出来上がっていく「しおり」は、「生きた」しおりとなっていくのではないだろうか。

簡素化できるものは簡素化し、ねらいに迫ることのできる「しおり」であってほしい。自然学校前の事前

学習で、5泊6日のねらい、このねらいに基づき個人の日程表を作成させる。このことにより学びを促すことにもつながっていくと考える。全体的な日程は宿泊棟に張り出しておけばよい。

5 先生が抱え込まない

―連携と役割分担―

自然学校が児童一人一人により良い変容をもたらすためのプログラム内容や運営という面に視点を当てて考えると、前年度踏襲型が多く、児童は毎年変わるからという発想が強く働いていてマンネリ化に陥っている傾向が強い。このことは改善すべき点である。さまざまな制約もあり、今すぐに改善することは難しいであろうが、児童にとって本来に必要とされることは何かを検討し、そのためにはどんな内容の活動を仕組むのか、自由な発想で内容を見直し、学校独自のプログラムデザインに取り組むことが重要である。そのために引率教員だけで全てを動かしていくのではなく、地域の人的資源、ボランティア団体、NPO、野外教育の技術指導員等、人的ネットワークを図り、役割分担しながら、引率教員

も児童も楽しみ、汗をかき、笑顔のある自然学校の実施を望むところである。

6 評価

○学校は

自然学校は実施要領により実施するのであるが、前述したようにやりっぱなしでは教育効果は期待できず、マンネリ化に陥ってしまう。兵庫県教育委員会は平成16年3月に、各学校が地域や学校、子どもたちの実態に即して自己評価を行う学校評価システムを構築する指針となる「学校評価ハンドブック」を作成した。この冊子の47頁に自然学校評価の例を提示している。評価項目は「教育課程に位置づけた全体計画の作成及びねらいの明確化・児童の安全・健康管理体制の整備・児童の主体性を生かした自然学校の実施・自然学校での体験がその後の生活に生かされる指導の工夫」となっている。この例に準じて各学校での工夫した評価をもとに自然学校の充実を図っていただきたい。

○児童は

児童にとっては、4しおりⅡシラ

パスで述べた「振り返り」が評価につながっていくと考える。振り返りの中で体験したことを言葉にし、文章にすることが大切である。何がどう自分に起こったか、これから何をすればよいか、体験し気づき知ったことから何が言えるのかを一般化し、仮説化するために文字や絵をつかって「しおり」にまとめ、話し合い振り返りや分かち合いにつなげていく。このことにより、出来事や考え、概念をイメージ化し、各自の知識としていく。この時、自然学校の体験は生きて働く知識となる。

○自然学校を支える方々は

(技術指導員・指導補助員・地域ボランティア・・・・)

児童だけでなく、それを支える指導補助員、技術指導員、地域ボランティアの方々にとっても、子どもたちが体験から何を学んでいるかという意識や、「あれ?」と思わせるような仕掛けや支援ができたか、全体の場での発問はねらいに迫ることができたか、明瞭簡潔で適切な指示ができたか等の振り返りが必要である。

7 地域に支えられる

これからの学校教育は、学校、家庭、地域社会が一体となって教育改革を進めることが求められており、地域住民の支援のもと学習の充実を図るなど、県民の参画と協働による教育活動の推進が必要となっている。自然学校においても児童の参画を図りながら計画実施をしていく例が多くなっている。今後は、地域ボランティアがプログラム開発から実際の指導補助員、地域ボランティア等が協働的な支援体制を確立することが望まれる。これまで以上に地域の支援が得られたとき、子どもたちの求めに対応した自然学校を創造し得る可能性は大きい。



野鳥界の小兵 (ミソサザイ)

南但馬自然学校 増田 克也



(写真1)

南但馬自然学校の秋は息を潜めたようにひっそりと訪れ、朝来山の色づきと共に深まりを増していきます。今では空を飛び交ったツバメは姿を消し、小鳥のさえずりも聞こえません。季節を問わず元気なのは子どもたちだけです。賑やかだった野鳥たちはどこへ行ってしまったのでしょうか。みんな南の国へ帰ってしまったのでしょうか？いいえ、そんなことはありません。秋になると越冬

のために北の国から渡ってくる野鳥がいます。また、国内に留まる野鳥の中にも、住みかを移し生活をするものがあります。今回は溪流で子育てを終え、本校に引っ越しをして冬を過ごす野鳥“ミソサザイ”をご紹介します。

まずは写真1をご覧ください。一見、地味な色の小鳥ですがこれが見事に周囲に溶け込み保護色になっています。おもに山地の藪を生活の場とし、本校の生活棟や本館の植え込み周辺でも出会うことができます。動作は大変俊敏で茂みの中へ出入りを繰り返し、あっという間に姿を消してしまいます。あまりに俊敏なので、子どもたちには双眼鏡を用いた観察は難しいでしょう。でも安心してください。こちらが動かず静かにしていると、すぐ近くまで来てくれ、十分肉眼で観察できるので双眼鏡は必要ありません。

ミソサザイの一番の特徴はなんといってもその小ささでしょう。日本の野鳥の中でも最小の部類で、スズメより一回り以上も小さく体長は10cm程度です。それでは体重はどれぐらいだと思いますか？写真2をご覧ください。一目瞭然！10円玉1枚と1円玉4枚より少し重たい程度で9g弱です。

この写真のミソサザイは、不幸にも窓ガラスに衝突し命を落としたものですが、今でははく製となり本校を訪れる子どもたちに愛嬌を振りまっています。

どうです…野鳥界切っ手の小兵、ミソサザイに会いたくありませんか？面会をご希望の方は、茂みの中から“チャッチャッ”という小さな声が聞こえてきたら、そっとその方向を見つけてください、愛らしい姿を必ず見せてくれるはずです。尚、本校での面会は秋冬限定ですのでご容赦ください。



(写真2)

いんふめーしょん

平成18年1月26日(木)、県民小劇場で 自然学校・体験活動フォーラムを開催します

期 日	平成18年1月26日(木)
対象者・定員	県下公立小学校教員 (初任者研修及び10年次研修として受講できます。) 各教育事務所自然学校担当指導主事及び専門指導員 市郡町組合教育委員会自然学校担当者、 自然学校指導補助員等400名
主 な 内 容	基調講演 「体験をとおした学びの意味」 明治大学教授 星 野 敏 男 シンポジウム 「自然学校・体験活動の教育効果、可能性を探る」
会 場	兵庫県民小劇場(兵庫県庁西館地階) (駐車場がありませんので各交通機関をご利用ください。)

自然学校を主とした体験活動に関する講演、シンポジウム、実践発表を通して自然学校、体験活動の在り方を探り学校教育における児童の体験活動の充実を図ります。

※参加申込書等のお問い合わせは南但馬自然学校指導課まで(☎ 079-676-4731)